

文学

季刊
第8巻・第1号
一九九七年
冬

岩波書店

特集=南方熊楠

- 〈座談会〉「南方学」への視座
宮田登・小峯和明・佐伯順子・松居竜五・飯倉照平(司会) 2
- 南方熊楠の食人論 ……………松居竜五 22
- 〈資料〉「日本の記録に見る食人の形跡(日本人太古食人説)」(翻訳)
- 南方熊楠の今昔物語集 ……………小峯和明 37
——説話学の階梯・明治篇——
- 『酉陽雜俎』の世界——南方熊楠と中国説話——……飯倉照平 50
- 粘菌への道 ……………後藤伸 64
- 南方熊楠 昭和期の日記 ……………中瀬喜陽 73
- 黎明期の「性科学」と相渉る熊楠 ……………月川和雄 84
——「ロンドン抜書」のなかの男色文献から——
- *
- 南方熊楠と空海 ……………上山春平 97
- 新日本新聞社からの手紙 ……………武内善信 100
——熊楠と自由民権——
- 中国の民俗学者江紹原と熊楠 ……………小川利康 104
- 熊楠と末吉安恭(麦門冬) ……………栗国恭子 107
- 伝播と発生 ……………松本三喜夫 111
——土橋里木の“熊楠体験”——
- 南方熊楠資料の調査とその展望 ……………原田健一 116
- 〔小特集〕芭蕉『奥の細道』自筆本の出現
- 《鼎談》新出本『奥の細道』をめぐる
櫻井武次郎・田中善信・雲英末雄(司会) 127
- 新出『奥の細道』翻刻補註 ……………上野洋三 147
- 忠度讃——花やこよひのあるじならまし—— ……………大野順一 162
- 文学史の流れを遡る(十) ……………久保田淳 173
- 女房がたり 歌がたり(五) ……………岩佐美代子 181
- 〈書評〉三冊の荷風評論をどう読むか ……………中島国彦 194
——論者の個性を逆照明するもの——
- 【文学のひろば】 ……………中野美代子・彌永信美・脇田晴子・高辻知義 119

中国の民俗学者江紹原と熊楠

小 川 利 康

南方熊楠が漢籍、とりわけ『酉陽雜俎』、『淵鑑類函』などの百科全書的な書物から多くの着想を得ていたことは、あらためて指摘するまでもあるまい。にもかかわらず、日本にやや遅れて誕生した中国民俗学との交流については、主として中国側の資料の不足・散佚により、まだ十分には明らかにされていない。本稿では、飯倉照平氏に提供いただいた資料ならびに筆者が入手した資料を元に、中国民俗学草創期の学者・江紹原（二八九七〜一九八三）と南方熊楠との交流を紹介する。

江紹原は五四新文化運動のさなかに北京大学に入学、在学中に周作人の知遇を得た。シカゴ大学留学を経て北京大学教授となる。留学中は宗教学を専攻したが、後に民俗学に転ずる。師とも仰ぐ周作人は一九二〇年代の過酷な政治状況に屈することなく戦い

続けた文人であると同時に、中国で初めてフォークロアに目を向け、日本、欧米圏の民俗学に至るまで精通していた中国民俗学の先駆的存在であった。その学風を受け継いだ江紹原の作品も、ユーモラスな言辞のなかに鋭い現実批判が込められ、単なる民俗学の学究で終わるものではなかった。魯迅・周作人を中心とする文芸雑誌『語絲』（一九二四年十一月〜一九三〇年三月）にも、民俗学にまつわるエッセイを寄稿し、散文家としても知られる。著作として『髮鬚爪——それらにまつわる迷信』『中国古代旅行の研究』、訳書には『現代イギリス諺俗及び謡俗学』があるほか、近年、生前の講義録『中国の礼俗迷信』、周作人・江紹原の往復書簡を整理校訂した江小蕙・張挺箋注『周作人早年佚簡箋注』が公刊され、基礎資料の整備が進みつつあり、そのなかで、

江紹原と熊楠との往復書簡の存在が明らかとなった。以下では、その経緯を簡単に追ってみる。

『周作人早年佚簡箋注』によれば、江紹原の著作『髮鬚爪——それらにまつわる迷信』は奥付に一九二八年刊行と記されているものの、実際には一年遅れて一九二九年夏に刊行された。江紹原は周作人宛の書簡（一九二九年八月三日付）で「もう一冊は、日本あの学者に先生からお贈り下さいませんか——この方のお名前も住所もみな忘れてしまい、先生からのお手紙も見あたらなくなってしまうので」と記している。この「学者」とは南方熊楠のことを指す。現存する一九二八年の書簡には献本先として南方の名前が明記されていることから間違いないだろう（一九二八年三月二十三日、三十一日付）。

さらに、田辺市の南方熊楠邸保存顕彰会による書庫調査で発見された江紹原の献本のコピーを飯倉氏のご好意により参照させていただいたところ、そこには江紹原からの英文のメッセージの書き込みがあり（署名と共にMay 1930と記されており、実際に熊楠宛に発送したのは更に一年近くも遅れたようだ）、「私の師であり友である周作人氏より勧められ」と述べており、周作人

の判断によって熊楠に贈られたことがはっきりする。これは興味深い事実である。日本留学中に『遠野物語』を買った思い出を語る周作人は、早くから柳田国男の『郷土研究』を定期購読し、日本の民俗学にも十分な理解があった。つまり、江紹原の著書を献本する唯一の日本人として熊楠を選択したのは偶然ではない。ここで詳論するゆとりがないが、確実に言えるのは、日本、中国にとどまらず世界の民俗習慣の伝播交流に寄せる強い関心を、熊楠と周作人、そして江紹原は共有していたのである。

さて、南方熊楠からの返信は、それから一ヶ月後の六月十五日付のものであった。江紹原は周作人に「南方熊楠から返信が来ました。いくつか髪の迷信に関する文献を指摘してくれたほか、細かい問題を二つ私に質問してきました」(一九三〇年六月二十六日付)と報告している。熊楠の英文の返信はすでに散佚しているが、『北京大学日刊』(一九三一年一月二十八日、三十日、人民出版社影印本)に、江紹原が自分の返信と共に掲載しているのが、中国語訳ながら内容は確認できる。

まず、江紹原の著作で述べる「髪」にまつわる迷信と由来に関して、いくつか補足材料を提供する前半部を訳出する。以下の

引用文中の()内の注記は熊楠自身のもの、筆者の注記は()で区別した。引用については原典を参照しているが、熊楠の引用の仕方を尊重した。なお、発表時の誤植については江紹原の長女・江小蕙女史所蔵の江紹原手稿を参照させていただき、訂正した。ここに記して改めて御礼申し上げる。

紹原先生：

非常に興味深いあなたの著作『髮鬚爪——それらにまつわる迷信』を五月二十一日に落手いたしました。ありがとうございます。多忙なために、まだ読み終えておりませんが、いくらか拾い読みしたので、雑駁にいくつか書き出し、再版を出す際の増補のお役に立てばと思います。

(一) 私の知るところでは、中国でも早く「髪を截る妖怪」に触れた記事は、『風俗通』(西暦二世紀撰)です。この書の巻九に次のような文があります。「汝南郡汝陽県の西門の亭に鬼魅あり、賓客宿止すれば、死亡するもの有り、その癘厭せられし者、みな髪を亡い、精を失う」(一)

『太平廣記』二八八、鄴城人の項に、「髪を截る妖怪」と偽って盗みをはたらく者が出てきます。

インド、あるいは西域(トルキスタンの一部)にもまたこうした妖怪がいることは、東晋の西域出身の高僧・帛尸黎密多羅が訳した『大灌頂神咒經』を見ると分かります。この書物の巻八で「人の毛髪を剪る鬼」というものを述べています。

「髪を截る妖怪」は日本の書籍にはきわめて多く、その最古のものの一つ、これが唯一最古でなかったとしたらですが、『元亨釋書(西暦一三三二年撰)』に見えます。この書の巻十二に曰く、「永久元年(西暦一一三三年)、宮人ありて、妖怪に髪を断らる。上は『僧、行尊』に勅して加持せしむ云々、蓋し宮人の相妬して巫蠱をなせるものなり」と(二)。

(二) 女を招き寄せる法術に髪を用いる。あなたの著書にはこの点に言及した箇所が見あたりませんでした。以下の文章は Notes And Queries(11th Series, XII pp. 84-85, ロンドン、一九一五年七月三十一日)から採録した私の文章です。

以下では、Hair used in Magic(『南方熊楠全集』一〇収録)の全文(中国語訳)が引用され、「この種の物語は貴国の書籍にもあ

るのではないかと思ひます」と結び、続いて、「次に二つばかりお尋ねしたいことがあります、是非ともご教示下さい」と述べて、次のように質問する。

(一) 『品花寶鑑』、『笑林廣記』及び他の書にも「毛病」という言葉があります。これは一体どのように解すればよいのでしょうか？

(二) 古代の日本の宮廷の貴婦人は中秋節(陰曆八月十五日)の夜には箸で芋を貫き、その穴から月を見て、詩を口ずさんだと伝えられています。大意は次のようです。

「月ごとに見る月なれどこの月の今宵の月に似る月ぞなき」(後水尾天皇(在位年西曆一六一二〜一六二九)の年中行事では「天皇は毎年中秋節の夕べには箸で茄子に穴を開け、其の穴から月を見て、祈禱文を誦したといひます(ついでに付記しておく)、日本の風俗では中秋節の夕べの月見には、生花と煮た芋をお供えとします(4)」。私の記憶では『廣東新語』で中秋節に触れるところで芋について述べていました。中国でも中秋節には芋が出るのでしょうか?) しかるに R. E. Enthoven の The Folklore of Bombay

(Oxford, 1924) (5) の四七頁に拠ると、

「時として処女は Parsa (6) 月(太陽曆十二月から一月の間)の月が満ちた日に誓いを立てることがある。その日には処女は自分の家の屋根の上で、自ら晚餐を作る。それからパンに穴を明けてその穴から月を見て、同時にある詩を誦し……。この儀式で父母と将来の夫の寿命を延ばすことが出来ると広く信じられている」と述べています。このインドの風俗が、中国から日本に伝えられて習俗となったのかも知れません。

この習慣が貴國のどこに現存するか、お教え下さい。 南方熊楠

一九三〇年六月十五日日本和歌山県田辺町

以上で熊楠の返信は終わり、江紹原、周作人の回答が続く。まず江紹原が類似した中秋節の風習を見聞したことはない、と断りつつも、書簡を公開して読者からも指教を乞う旨の回答する一方で、熊楠に対して新たな質問を發している。

また私は先生にもう一つご教示をお願いしたいのです。莞荃(香草の一種、コリアンダー)や他の植物の種まきの際に

卑猥な言葉を口にしたたり、夫婦で共に種まきをする習俗がペルシャか他の国にありますでしょうか(これに関するエッセイを何篇か同封しましたのでご覧下さい)。

文中で述べるエッセイとは、文芸雑誌『語絲』第一二七、一三三、一四五期(いずれも一九二七年)に掲載されたものであったろうと思われる。古代の婚礼、性風俗に関する江紹原の発言から始まった議論は、周作人、魯迅らの補足によって、香草や胡麻を植える際の習俗の話題へと發展し、植物とともに西域から伝えられた可能性が指摘されていたのである。周作人らにとって、民俗学とは伝統的風俗習慣を単純な道德論から離れたところで分析するための手段であったから、じつに恰好の話題であった。とりわけ周作人は、この故事を用いて一三四年に五十歳の自寿詩を作っただけでなく、後に「八十自寿詩」でも用いており、愛好のほどが窺われる(7)。その意味で一見唐突にも見える質問からは、同様の関心を共有しうる日本人、熊楠への期待を読みとることも可能だろう。

末尾の周作人からの返答では、『品花寶鑑』での「毛病」(欠陥、病気の意)の用法

が男色を指しているのではないかという推測が述べられ、もう一冊の『笑林廣記』は現在手元にないたためと詫びて、後日の回答を約していた。

以上の書簡は実際に熊楠宛にも郵送されたはずであった。だが、熊楠邸で整理中の資料の中からは今のところ発見されていない。彼らが共有しえたはずの民俗学の姿もまた遺された著作の中から探るほかないようである。

〈1〉 偶然の一致ながら、江紹原自身も一九二六年九月に文芸雑誌『語絲』(第九八期)で自著の補足として、この箇所を引用している。

〈2〉 原典『大日本仏教全書』101(名著普及会覆刻)所収の『元亨釋書』原文と照合したところ、熊楠の引用にはかなりの省略があった。文中の「行」とは僧侶の名前で、園城寺行尊を指す。

〈3〉 『統古今和歌集』卷十七、天曆御歌。

〈4〉 『北京大学日刊』掲載の書簡では、誤植で「魚」となっていたが、江紹原の自筆原稿によって「芋」に正した。

〈5〉 原典は未見。Enthoven. Reginald. Edward 著 The Folklore of Bombay(1924, Clelandon Press)も熊楠の書庫に現存する由、飯倉氏からご教示いただいた。

〈6〉 Pansk は梵文と思われるが、未詳。

〈7〉 澤田瑞穂「種まきの呪法」『節令』第四期、『中国の呪法』平河出版社、一九九〇年五月修訂版収録)、松枝茂夫「知堂老人」『八

十自笑』の詩「節令」第五期)に詳しい紹介がある。

参考文献

飯倉照平「南方熊楠にとっての中国」『南方熊

楠日記2』一九八七年十一月、八坂書房刊)

拙稿「江紹原と周作人Ⅰ、Ⅱ」(大東文化大学紀

要33、34、一九九四、九五年三月)